

C-58 室町時代の衣服の形態とその裁ち方・縫い方について、(第3報)
福島大教育 栗原澄子

目的 日本の男子が昔から用いていた袴類で、今日遺品として残されているものにはどんな種類のものがあるか、形態・製作方法・その他はどうであったか。また、その変遷はどうであったかをしらべる。

方法 今回は、室町時代の奉納といわれている熊野蓮玉大社の袴類(表袴・指貫・生袴——付札は引袴・張袴——)・阿須賀神社の袴(表袴)・熱田神宮の袴類(表袴)を調査した報告である。

結果 表袴は、熊野と阿須賀のものはほぼ同形態で、阿須賀と熊野の/腰には中倍が付いていたが、熊野の他の/腰と熱田のものには中倍はなかった。脇かかりは、熊野と熱田ではかかりの方法が違っていた。また、熱田の表袴は補修のときの誤りと思われるが、3腰とも違った袴の付けかたがしてあったが、これも当時は熊野や阿須賀のものと同様の形態であったと考えられる。熊野の生袴類は、今日形態を止めているものはすべて腰(紐の部分)や裾口が破損しているのが、当時の形態や各部の寸法・細部の縫製方法など明らかになることはわからなかった。